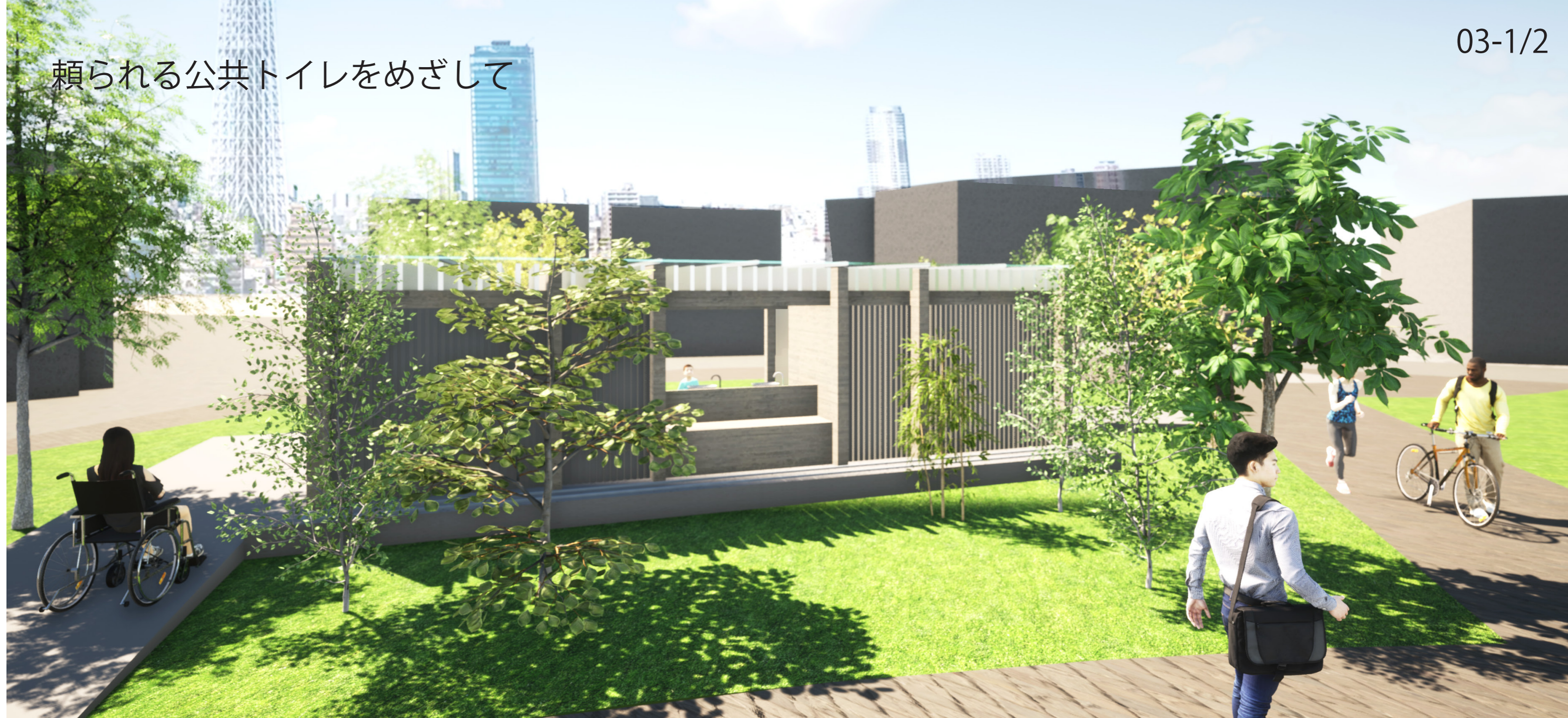


# 頼られる公共トイレをめざして



## (0) 固定観念の払拭

トイレは毎日利用されるといってもいいほど生活に根付く場所であるのに、公衆トイレは怪訝されている現状がある。というのも、今日の公衆トイレの多くは「怖い」「汚い」「臭い」「暗い」のイメージが強いためである。そこで私は、公共空間におけるトイレの悪いイメージを払拭し、“使われる”トイレとするとともに、墨田区という災害に弱い地域を支え、頼られるトイレを提案する。

### トイレの悪いイメージ



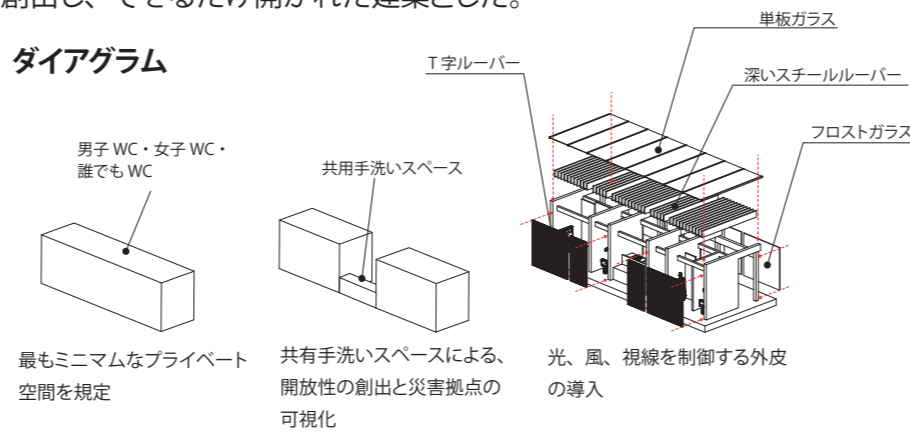
### 頼られる公共トイレ



## (i) 開かれた公共性と閉じられた快適性

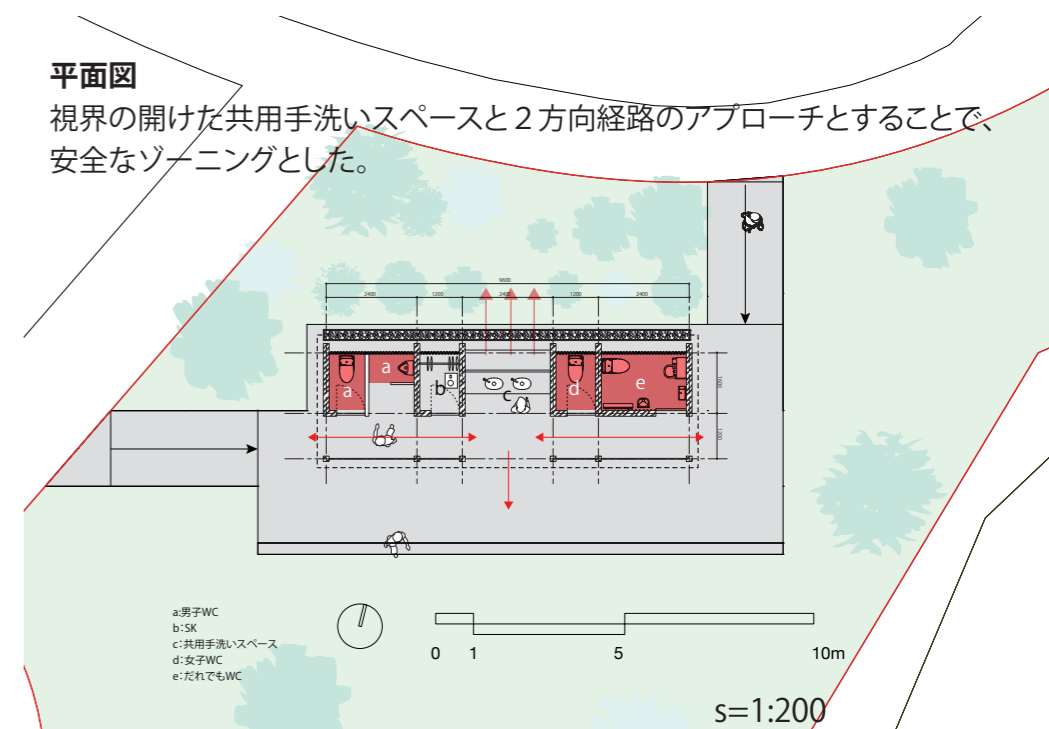
トイレの悪いイメージを払拭するためには、安全性を担保する開放性とトイレとしての快適性を維持するための閉鎖性を備えなければならない。この相反する二重の機能に着目し、ミニマムであるながらも快適な閉鎖空間を創出し、できるだけ開かれた建築とした。

### ダイアグラム



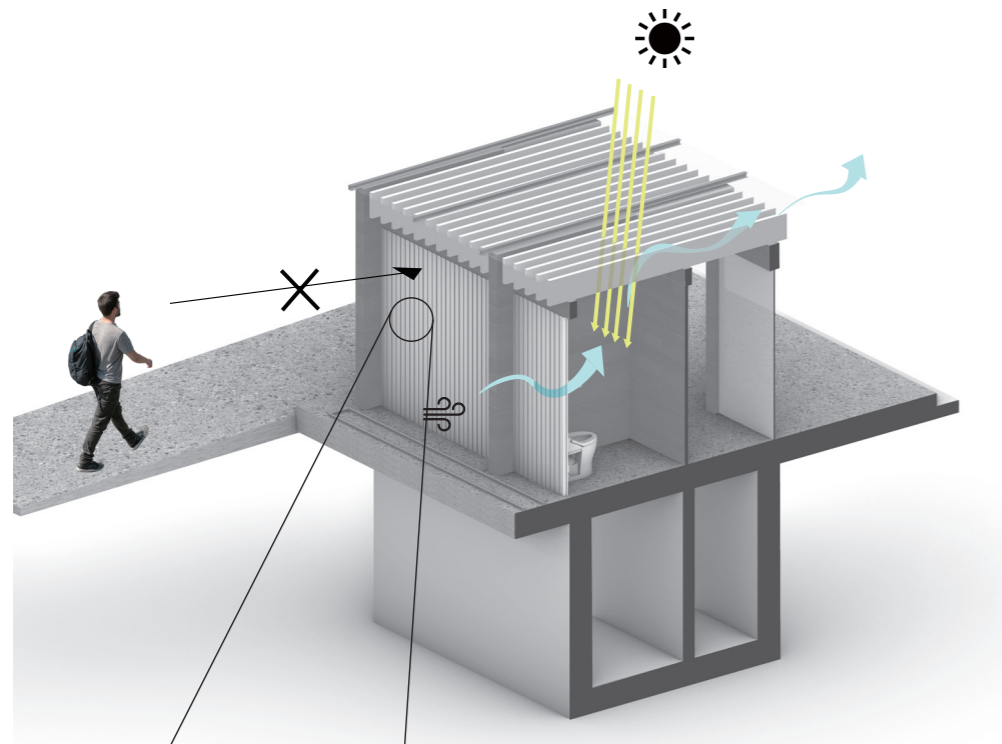
### 平面図

視界の開けた共用手洗いスペースと2方向経路のアプローチとすることで、安全なゾーニングとした。



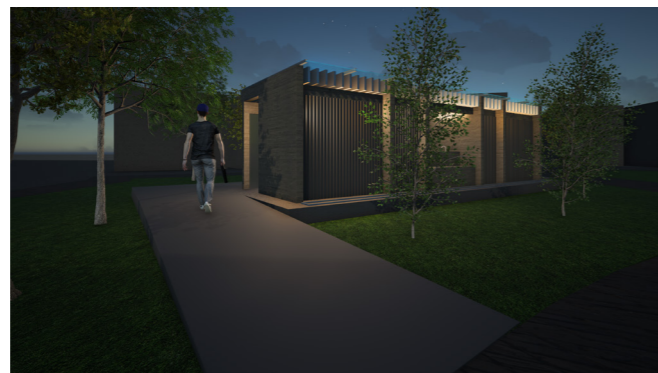
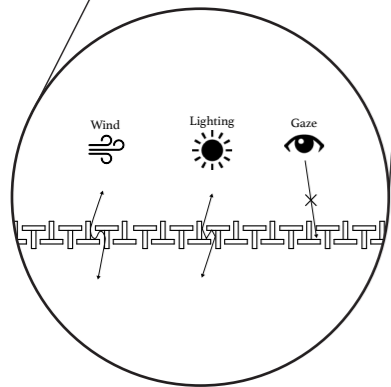
### (ii) 閉じられた快適性のための外部環境制御

トイレは住環境において最もミニマムでプライベートな空間である。その役割を果たすために、光、風を適度に取り入れ、視線を制御する2つのルーバーを採用した。



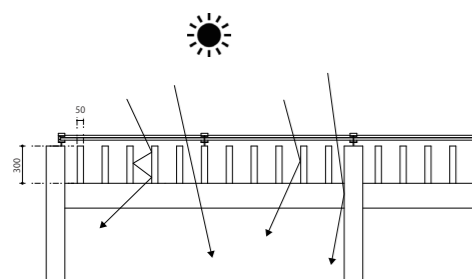
#### 【T字ルーバー】

視界を遮り、光と風を透過するフィルターとなる。夜はルーバーから漏れた光が道を照らし、地域を見守る。



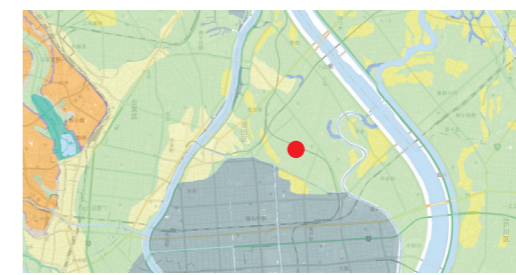
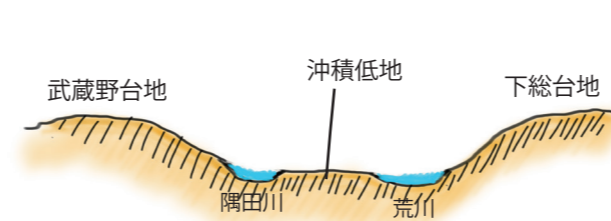
#### 【深いルーバー】

- ・直射日光とそれによって反射した光が室内空間に彩りを作る。
- ・ルーバーは空気の通り道となり、自然換気を誘発する。

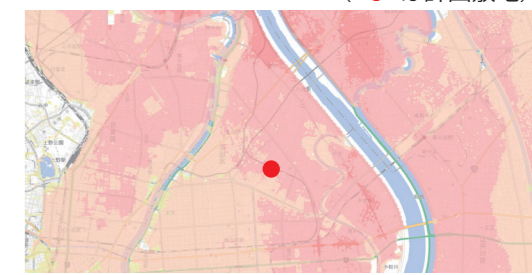


### (iii) 水の供給拠点としてのトイレ

墨田区は23区内でも有数の災害危険性の高い地域であり（東京都都市整備局より）、軟弱地盤に属している。そのため、地震の被害と液状化の危険性が高い。また、2つの台地に挟まれた低地に位置し、洪水の被害も免れない。そこで、災害直後も地域の人々に水を供給する拠点とするために、地下に貯水槽を備える。



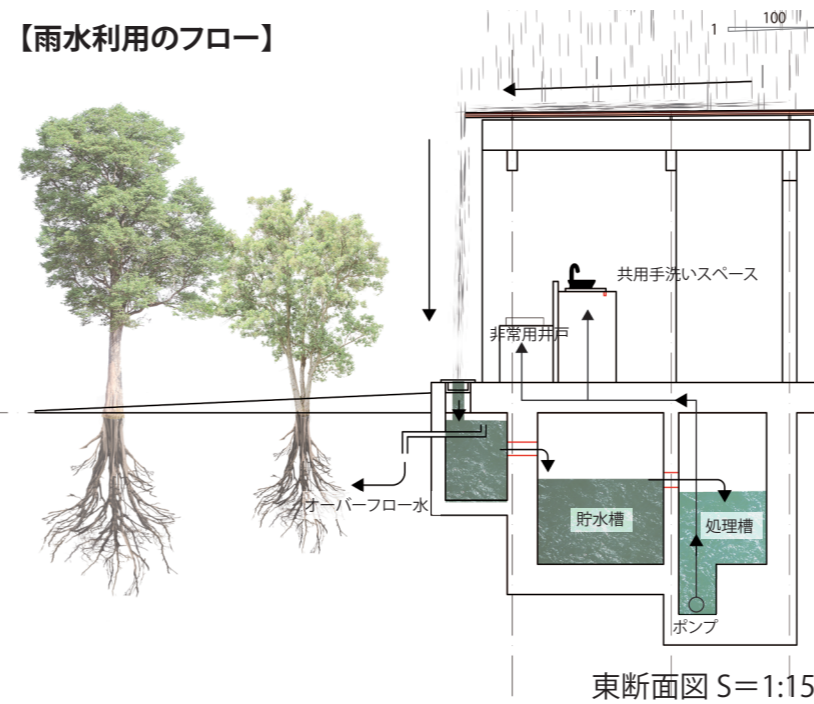
地形分類では軟弱地盤である汎濫平野に該当。



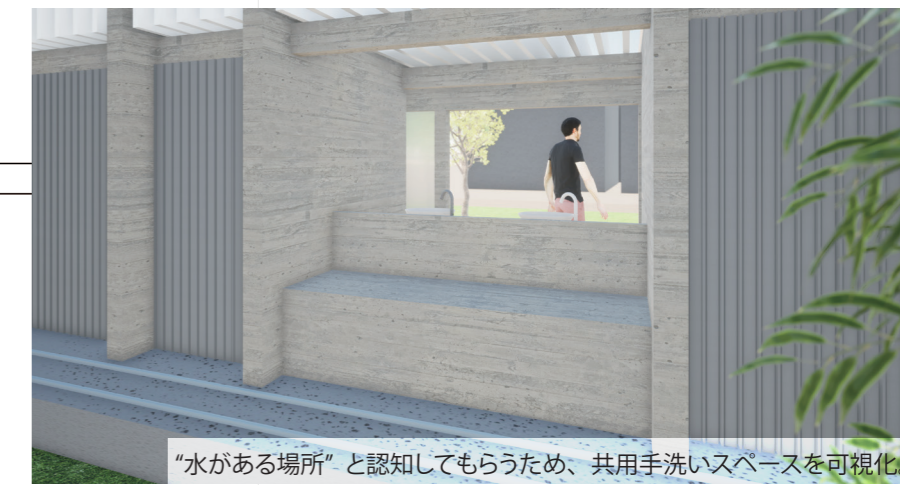
洪水浸水想定区域に指定。計画敷地では3~5mの浸水が想定される。

(●は計画敷地)

#### 【雨水利用のフロー】



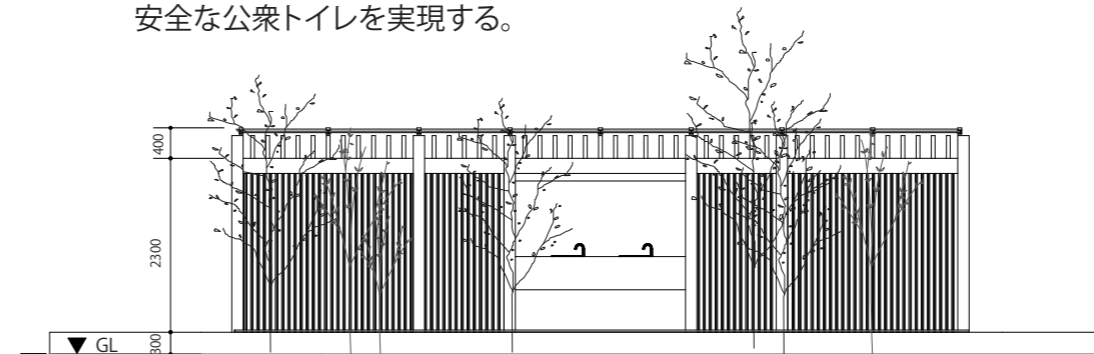
雨水を貯水槽へと流す。オーバーフロー水は植栽へ散布。処理層に貯められた処理水は日常時には手洗い場の水、非常時には井戸水として利用される。



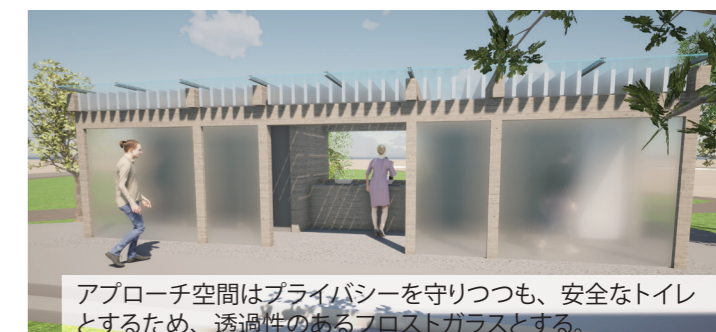
“水がある場所”と認知してもらうため、共用手洗いスペースを可視化。

### (iv) わかりやすく、安全なトイレ

公共のトイレは誰もが利用できるようにするためには、わかりやすさは欠かせない。構造体と機能を一体化し、利用者にとってわかりやすいファサードとした。また、逃げ道となる2方向経路と外皮に透過性を持たせることにより、安全な公衆トイレを実現する。



構造体が機能を表出する。  
北立面図 S=1:100



アプローチ空間はプライバシーを守りつつも、安全なトイレとするため、透過性のあるフロストガラスとする。



2方向経路のアプローチ空間